

新地域ビジョン構成案 検討ノート

— 骨子・概案の作成に向けて —

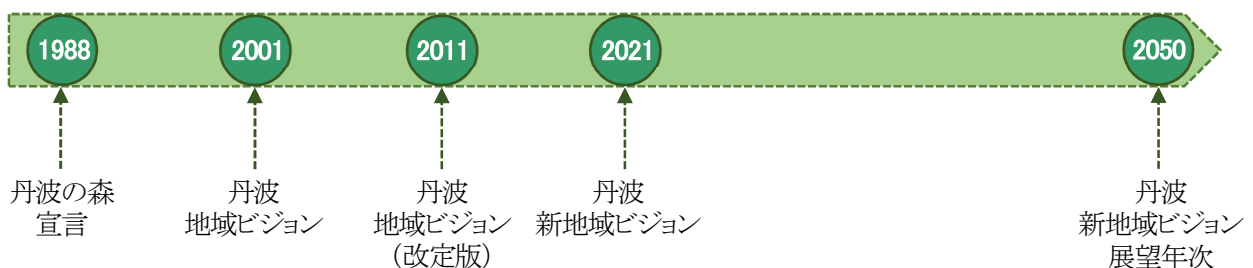
令和3年7月

丹波県民局県民交流室

1 はじめに—新ビジョンの役割・性格—

- 新ビジョンは、2001年策定（2011年改訂）の「丹波地域ビジョン」の後継ビジョンとして、2050年を展望年次として地域の将来像を描いたものであり、これまでの丹波の森づくりの理念・取組の発展的継承をめざすもの。この新ビジョンの役割・性格は以下に示すとおり。
- 30年後に向けた「ビジョン」であるとともに「シナリオ」
 - 望ましい地域の将来を描くビジョンであるだけでなく、ビジョン実現に向けた道筋、アプローチを示すシナリオとして位置づけられるもの
- 『挑戦・成長』し続ける「ビジョン」—現ビジョンの考え方を踏襲—
 - 挑戦的な目標（ムーンショット）を掲げ、そこから遡って（バック・キャストイングして）、近未来（ポストコロナ社会）、現在になすべきことを考える
 - 可能性の追求：地域の課題を提起しその解決にあたるというよりもむしろ、地域資源、人材、結びつきなど地域の強みを活かし伸ばす、ポジティブ志向のアプローチをとる
- 変化を厭わない、やわらかな「ビジョン」
 - 伝統と革新：地域の風土・伝統に立脚しながらも、時代の変化に柔軟に対応し、新しい革新的な取組を生み出していく
- 『人×自然×技術』のビジョン
 - 人と自然（生き物）の共生と人（感性）と技術の調和をめざす。技術の力を活用しつつ、人間性の追求、自然の再生を図っていく
- 基調：『参画と協働』から『共感・共進化・共創』へ
 - 現ビジョンの基調である『参画と協働』の理念（「みんなで丹波の森」）のさらなる深化をめざし、新ビジョンの基調を『共感・共進化・共創』（「ともに感じ、ともに成長し、ともに創る」）とする（3つのC）

- ・納得と『共感』（compathy=sympathy）：各主体が納得し、共感（当事者意識）を抱いて主体的、積極的に取り組む → 主体性の発露としての参画・協働
- ・学習による「共進化」（co-evolution）：各主体が学習、活動を通じ、共に成長する、自らの能力を開発 → プロセス自体に意義を有する参画・協働
- ・価値の「共創」（co-creation）：新しい価値創造をゴールに → ミッション・目的志向の参画・協働



Ⅱ わたしたちの丹波—風土・文化、ポテンシャル

○ 典型的な多自然地域であるものの、多彩な固有の魅力を放つ地。それが丹波

[共生]

- 森林が地域面積の約75%を占め、山々が幾重にも連なる丹波。どこにいても身近に里山があり、自然とのふれあいを楽しむことができる
- 加古川、由良川、武庫川の源流に位置し、貴重種をはじめ多種多様な生き物が生息する豊かな自然環境が保たれている。氷上回廊には北方系、南方系の植物、魚類が共存

[豊穡]

- 盆地特有の寒暖差のある気候のもと、深い霧栄養を蓄えた粘土質の土壌、澄んだ空気と清らかな水に恵まれ、古来より豊穡の地として知られてきた
- 丹波三宝として全国的に名高い丹波栗、丹波大納言小豆、丹波黒豆に加え、粘りと甘みのある米、山の芋、猪肉・鹿肉、松茸、有機野菜など多彩な食材を誇る

[伝統]

- 中世に誕生した能楽のルーツである丹波猿楽や、江戸時代の民謡を起源とするデカンショ節（日本遺産）など、独自の民俗文化が脈々と受け継がれてきた
- 日本六古窯の一つに数えられ、日本遺産に認定されている丹波焼（立杭焼）や丹波織、丹波木綿と、歴史ある工芸品を生み出してきた
- 城下町、宿場町の歴史的建造物が保全され、伝統的なまちの佇まいが今も残されている。山裾や川沿いに点在する農村集落には、日本の原風景が広がっている

[交流]

- かつては城下町や山陰道・京街道の宿場町として賑わい、都や諸国との間で文物の交流が育んであった
- 高度成長期以降半世紀にわたる都市農村交流の歴史を有する。地区・集落単位での都市との交流のほか、青少年施設や大学サテライトを介した交流が進められてきた

[地勢・地質]

- 盆地内の平坦な田園地と比高600m余の屏風状の山並みによって、四季折々の変化に富んだ景観を創り出している
- 本州一標高の低い中央分水界（水別れ）を中心として、瀬戸内海側と日本海側の生き物が出会い、行き交う低地帯（氷上回廊）を形成
- 前期白亜紀の地層である篠山層群が広がり、丹波竜などの恐竜類化石の発見が続いている

[気質]

- 温厚な気質の人が多いといわれている。それが外部の者を受け入れる、寛容性に富んだ風土を生んでいる

Ⅲ 丹波の森づくりのこれまでとこれから—継承と発展—

- 丹波の森づくり 30 有余年、丹波地域ビジョン 20 年の地域づくりの取組をレガシーとして次世代に引き継ぐことが、新ビジョンに課せられた使命
- 宣言当時、自然との共生を謳い、先導的であった丹波の森づくりの理念は、今や普遍的なものに。それはふるさとづくりを進める地域創生の考え方を先取りしたもの
- 丹波の森づくりの理念は、**SDGs**(持続可能な開発目標:Sustainable Development Goals)の考え方とも軌を一にし、世界で広く共有されるもの

1. 「丹波の森づくり」とは

- 丹波の森は幅広い概念を包含している。『私たちを取り巻くすべての環境』を「丹波の森」とする考え方を継承
『森』 = 森林、田園、集落、まちを含む空間全域
= 人、生き物全ての営み (丹波の風土・文化、生業、テロワール)
= 人々の結びつき、ネットワーク
- 丹波の森づくりとは、『人と自然と文化の調和した地域づくり』であり、『みんなの共通のふるさとを創っていこう』とする試み。地域住民だけでなく、丹波を愛するすべての人のためのふるさとづくり

『ふるさと丹波のかけがえのない美しい自然はもちろん、暮らしやなりわい、地域内外の人々との交流、生活空間、生活文化など、私たちを取り巻くすべての環境を「丹波の森」と考え、より良い地域づくりに取り組んできました』

(丹波地域ビジョン・丹波の森構想)

『「丹波の森がどこにあるのか？」とよく聞かれます。「鎮守の森」のように思っているわけです。「これが丹波の森です」というのではなく、丹波全体が一つの森に囲まれた、一つのユートピア、丹波に住んでいる人にも暮らしやすいし、外から来ても楽しいところだというみんなの共通のふるさとを創っていこう、これが丹波の森構想だと思います。』(河合雅雄先生：丹波の森大学講義録『自然と人間』)

- 丹波の森づくりの担い手である「もりびと」。それは森を愛し、森を守るひとたちの総称。現ビジョンではもりびとを「森の市民」と表現し、「地域内外を問わず、丹波地域に誇りと愛着を持ち、丹波の地域づくりに責任を持って行動する自律した人々」と規定
- 「もりびと」は、伝統を守りながらも未来社会を切り拓く活動的、能動的人材として期待される人たち。その役割を多岐にわたる

- もりびと
守人：自然景観・環境を保全する、地域の安全・安心を守る
- もりびと
盛人：生業を興す、地域を活性化する 開かれた地域を創る
- もりびと
鉦人：先陣を切る、社会に風穴を開ける 新しい時代を切り拓く
- もりびと
策人：参画・企画する、将来をデザインする、シナリオを描く

2. 丹波の森づくりの成果とレガシー

○ 「丹波の森宣言」の推進状況

宣言1 丹波の健全な発展をそこなうような自然破壊は行わず、森を大切に守り育てます

→ 森林の管理をはじめとして、丹波らしい土地利用が進むとともに、里山や水辺環境の再生に向けた取組が進展。農地・農業の保全に向け、仕組みづくり、担い手の育成が図られる。野生動植物との共生に向けた活動（希少動植物の保護）が活発化

宣言2 丹波の自然景観を大切にし、花と緑の美しい地域づくりを進めます

→ 丹波らしい景観の保全・形成が進む。自然を体感できる場・空間（丹波の森公苑、丹波並木道公園等）が生まれ、景観ネットワークが形成される（ふるさと桜づつみ回廊、たんば三街道）

宣言3 丹波の文化景観及び歴史的遺産を大切にし、個性豊かな地域文化を育てます

→ 歴史的景観・建造物や文化遺産（日本遺産等）の保全・活用が進められるとともに、自然遺産である恐竜化石を活かした地域づくりが進展。丹波ならではの特色ある芸術・文化の振興（県立陶芸館、シューベルティアーデたんば）が図られる

宣言4 丹波の素朴さと人情を大切にし、安らぎと活力に満ちた地域づくりを進めます

→ もりびとが育ち、その地域での活躍が目立つようになる。域内外の交流が活発になり、移住・環流、起業も拡大。丹波製品のブランド化が試みられる。ふるさと教育・食育の推進などにより、丹波の誇り（シビック・プライド）の醸成が図られる

○ 未来へとつなぐ森づくりのレガシーとは

[プラットフォームとしての制度的枠組み]

→ 県、市の条例施行や広域計画・指針の策定などを通じて、自然、景観、街並、歴史的建造物などの保全の枠組が整備されてきた。今後は、これらの枠組みを堅持するだけでなく、環境変化に応じて柔軟に見直していくことも重要である

[人的資本の蓄積]

→ 丹波の森大学等の場を通じて、実践活動の中心となる担い手（もりびと）が輩出されている。引き続き、この人材育成の仕組みを維持・発展させるとともに、地域内外での新たな担い手の発掘によって次代への活動の継承を図る必要がある

[つながり（ネットワーク、ソーシャル・キャピタル）の形成]

→ 森づくりの活動等を通じて地区・集落・個人単位で様々な外部とのつながりが育まれている。大学生による社会貢献活動も定着し地域と大学の連携も深化している。こうしたつながりのさらなる拡大による森づくりの新たな担い手創出が期待されている

[拠点の形成と特色ある活動の展開]

→ 域内では、丹波の森公苑をはじめ各種施設が整備され、生涯学習、環境学習、芸術文化振興等の拠点が誕生し、そのもとでシューベルティアーデたんばなど特色ある活動が展開されている。今後、拠点の機能更新や活動を支えてきた仕組みの継承・発展が課題となる。

[市民精神の広がり]

—もりびとの活躍やまちづくり協議会・自治振興会等の活動を通じて、地域主導、市民主役の取組が拡大している。またその活動のなかから森づくりを担う新たな組織も生まれている。拡大する自助・共助の活動を内外の多くの人が支える仕組みの構築が今後重要になる

[ふるさと意識の醸成]

—地域に愛着を持つ人や地域資源に誇りをもつ人が増え、ふるさと意識が醸成されつつある。ふるさと意識の高まりこそが、丹波の森づくりの最大の成果でありゴールであることから、次代に向け、ふるさと学習をはじめとするこれまでの取組の継続・拡大が求められる。

3. 新地域ビジョンの方向性

- これまでの新地域ビジョンづくりの過程（「検討委員会・分科会」、「ビジョンを語る会」、その他ヒアリング）で得た地域の将来像に係る意見を集約・分析（テキスト・マイニング¹等の手法も活用）
- その結果から、『森』、『農』、『人』が今後の丹波の将来を考えるうえで重要なキーワードであることを再確認
 - ┌ 森（地域空間）＝豊かな森（空間）を守り、活かす
 - ├ 農（暮らし、社会、産業）＝農のある暮らしを楽しむ 農の営み、生業を創る
 - └ 人（つながり、絆、コミュニティ）＝丹波を愛し、丹波を担う人をはぐくむ
- 『森』は丹波の地域空間を象徴する言葉として、『農』は丹波の暮らし、生業、産業を象徴する言葉として捉えると、現ビジョンの『丹波を育む3つの環』（自然の環、人間の環、産業の環）の考え方の延長線上に今後の将来を描くことが適切であると認識。

『丹波のいのち（＝自然）、ひと（＝人間）、なりわい（＝産業）の3つの環をはぐくむ（「守り」「育て」「活かす）」』（丹波地域ビジョン）

- 丹波の森づくりの継承・発展をめざす新ビジョンでは、「つなごう丹波の森づくり」を謳い、「丹波の森づくり『第2章』」を宣言。そして、『3つの環』を再評価しつつ、環境、社会、経済の統合的向上・発展に向け、時代潮流に即した新たな取組を柔軟に進めていく必要性を提起
- 2050年の地域社会像を森＝環境・空間、農業＝社会・経済、人間の3つの側面から描くとともに、3側面を横断（統合）する全体的な将来像を示していく
- **新地域ビジョンの基本理念**

＜今後検討＞

『人を創り、森を（守り）活かし、生業を興す（価値を生み出す）ことで丹波を創生』
『主体形成⇔資源活用⇔価値（所得・雇用）創出を一体的に推進』

¹ 文章（テキストデータ）を単語や文節で区切り、それらの出現の頻度や共出現の相関、出現傾向などを解析し、頻出語や特徴語を抽出する手法

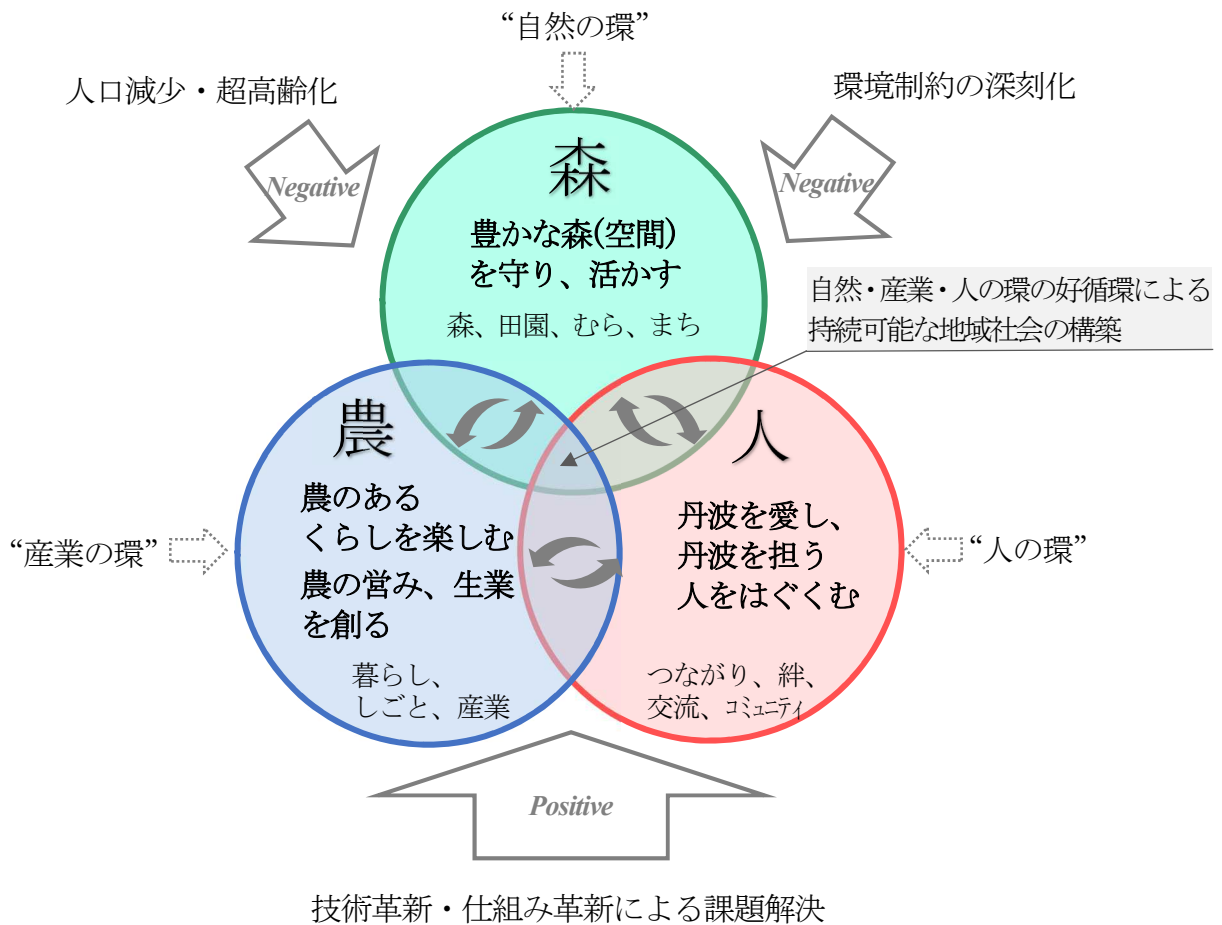


図 新地域ビジョンのキーワード

4. 新地域ビジョン検討の視点

新地域ビジョンの検討にあたっては、丹波のポテンシャルやこれまでの丹波の森づくりの取組を踏まえ、以下の視点を重視するものとする。

○ 全ての人を温かく包み込む、開かれた地丹波—「寛容性」(開放性・包摂性)

- 丹波の森づくりでは、交流のコンセプトを重視し、住民だけでなく、ビジターをも広く受け入れて取組を推進してきた。今後も、丹波の森構想の理念（「活力ある開かれた地域社会の実現」）に則り、定住人口だけでなく、想いを共有する「関係人口」（一時滞在者、二地域居住者、出身者等）にも開かれた地域づくりの実践が求められる
- 域内で外国人居住者が増加しているなかでは、多文化共生の視点に立った取組の推進も求められる。それが森づくりのグローバルな発信にも寄与する
- 地域における多世代間の交流やダイバーシティの確保といった観点も重視していく必要がある。結果的にそれが取組の成果を高めることにもつながる

○ 資源、ものが循環し、社会、経済も回る最適化社会丹波—「循環性」

- 森の豊かさを誇る丹波。この森の資源を循環利用することで、豊かな暮らしを実現させる取組が重要になる。木質バイオマス利用によるエネルギー自給率の向上や丹波の風土にあった新しい住まいの開発などが期待される
- 食の豊かさを誇る丹波。地産地消により、食糧自給率の向上や域内消費の拡大を図るとともに、フードマイレージの低減化を進め、ゼロカーボン社会を実現していく
- 様々なものを地域全体で共有し、循環利用する仕組み（シェアリング・エコノミー）を構築することも、環境負荷の低減、リーズナブルな暮らしの実現、持続可能な社会経済の構築をめざすうえで重要。

○ 多様な機会と選択肢に恵まれた、約束の地丹波—「可能性」

- 大都市に近接するも、豊かな自然に恵まれた丹波。都市のサービスを享受しつつ、自然と共生する暮らし、スローライフを送ることのできる丹波では、ライフスタイル、ワークスタイルの選択の幅は広い。実際、近年の移住者のなかに、移住とともにやりたい暮らし、しごとをはじめ、個性的なライフスタイルを実現している人が多い
- 現在のデジタル革新の波と働き方改革の進展は、丹波でのくらしの幅をさらに広げる可能性がある。多様な選択肢に恵まれた地であることをアピールし、多彩な人材の集積を促すことは、丹波におけるイノベーション促進や起業拡大につながる。そして、それは活力に満ちたダイナミックな地域社会の実現に寄与することになる

○ ここでしか体験できない、味わえない丹波ならではの魅力—「固有性」

- デカンショ踊り・立杭焼（日本遺産）、黒枝豆（日本農業遺産）、恐竜化石、水別れなど固有価値の高い地域資源を有する丹波。地元でも「住んでいる地域に自慢したい『宝』がある」と思う人が増えている（県民意識調査）。
- この価値ある地域資源をさらに磨き直し、世界の中で丹波でしか体験できないオンリーワン、グローバル・ニッチな魅力を新たに創り出していく発想が重要。それにより、域外の人々を丹波へと誘うことで活力の向上、ひいては移住・定住の拡大を実現することができる

○ 世界に伝播する丹波スタイル—「普遍性」

- 固有性を有する一方で、世界に通じる普遍的な要素をあわせ持つ丹波にすることで、その魅力はさらに高まる
- 世界的に SDGs の達成とともに、AI、ロボット等が普及する超スマート社会（Society5.0）への対応が課題となるなか、デジタル技術の力を活かした、自然の中での新しい暮らしのかたち（持続可能な自律分散型居住モデル）は、世界が希求するものである
- 先端技術の地域実装を意欲的に進め、丹波の豊かな森を未来社会の暮らしの実験場とすることで、世界のモデルとなる丹波スタイルの創造・発信を図る